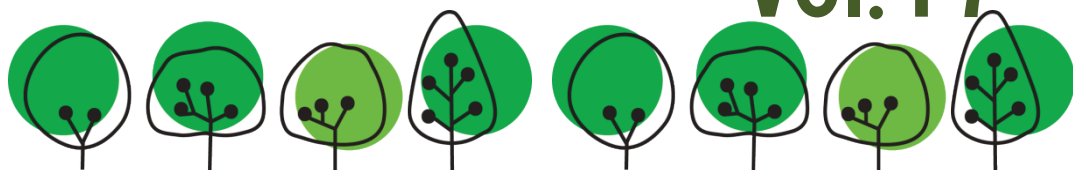




木地師のふるさと

vol.17



R8. 1 発行

木地師シンポジウムを開催しました！

全国から108名の方々にご参加いただきました。

11月8日にアピアホールで「伝統の継承と近代化」をテーマに木地師シンポジウムを開催しました。

全国から多くの方にご参加いただくとともに、偶然立ち寄られた来場者の方々にも、木地師文化に触れていただく貴重な機会となりました。



シンポジウム会場の様子

当日プログラム

開会挨拶 小椋 正清（東近江市長）

基調講演 「ろくろと万年筆 一近代文字文化の基盤一」 小池 淳一さん（国立歴史民俗博物館教授）

パネルディスカッション 「木地師における伝統技術の継承とその課題」

《パネリスト》露木 清勝さん（寄木細工職人）、長谷川 利之さん（木地職人）、渡邊 嘉久さん（漆職人）、川北 浩嗣さん（木地職人）、下村 祐介さん（木地職人）、

《コメンテーター》小池 淳一さん、小椋 正清

《コーディネーター》筒井 正（東近江市参与）

●木地製品やタペストリーの展示

展示会場では、令和6年度に木地師のふるさとアーカイブ・プロジェクトの成果として制作した木地師文化を紹介するタペストリーを、市が所蔵する木地製品と併せて展示し、暮らしの中の様々な場面で使われている木地製品を見ていただきました。

シンポジウム会場ではパネリストである職人の皆さんの作品を展示しました。シンポジウム終了後には、作品を囲んで活発な交流が生まれ、多くの来場者が職人の技や思いに熱心に耳を傾けていました。



木地製品の展示



タペストリーの展示



パネリストの作品展示

基調講演「ろくろと万年筆―近代文字文化の基盤―」

小池淳一さん（国立歴史民俗博物館教授）

■ 万年筆職人の技術と気質

万年筆は、エボナイトやセルロイドといった素材をろくろで削り出して作られます。こうした製作工程には、木地師が培ってきたろくろの技術が応用されています。私自身、民俗学の立場から「職人の生活」や「技術の習得過程」を研究してきました。

万年筆職人の技術をより具体的に知っていただくため、手作業で万年筆を削り出す職人の姿を収めた映像を紹介します。



小池淳一さん（国立歴史民俗博物館教授）

セルロイドなどの素材に刃物を当て、回転する機械を用いて表面を削り、穴を開け、ねじを切っていきます。仕上げの工程では、やすりを使いながら、同じく回転する機械によって磨きをかけていきます。映像からは、製造工程に応じて様々なろくろが使い分けられていることや多様な素材がろくろによって加工されていることがよく分かります。

大阪府立商工経済研究所がまとめた大阪の万年筆工業に関する書籍には、万年筆職人が一般労働者よりも厳しい労働環境に置かれながらも、職人としての誇りを持って仕事に向き合っていたことが記されています。万年筆の製造は、最終的には個人の技量に帰着する仕事であったことがうかがえます。

そうした職人の気質については、職人へのインタビュー映像でも紹介します。そこには、身につけた技術を頼りに、腕一本で各地を渡り歩きながら生きてきた職人の姿が映し出されています。

映像に登場するのは、手作業で万年筆を作る職人として大阪で最後の一人となった加藤清さんです。大阪の万年筆製造所には東京から移ってきた職人もおり、比較のおとなしかった大阪の職人とは対照的に、やんちゃな人が多かったそうです。親方としては他の職人への影響を心配しつつも、腕が良く仕事も早かったため、職人同士が「1 時間に何本作れるか」を競い合うなど、現場の競争心を刺激していたというエピソードが語られています。

■ 日本近代の文字文化と万年筆

日本の文字文化は、漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットと、成り立ちや性質の異なる文字を併せ持っている点に大きな特徴があります。アルファベットのみを用いる海外とは異なり、日本では多様な文字体系に対応する必要がありました。万年筆は海外から伝わった道具ですが、こうしたことが日本独自の発展を遂げていった背景といえます。



ろくろによって生み出された
万年筆

また、かつての日本では、和紙に筆・墨・硯^{すずり}を用いて文字を書くのが一般的であり、文字を書くためには複数の道具を準備する必要がありました。万年筆の登場によって、一本あれば文字を書くことができるようになりました。しかし和紙には書くことができないため、洋紙を必要とし、洋紙やペン、インク作りなど、近代化の基盤を支える産業構造を形成しました。こうしてできた万年筆によって、場所を選ばず外でも気軽に筆記が可能になりました。

■ 万年筆職人と木地師のふるさと東近江

蛭谷町にある筒井神社には、大阪万年筆製造組合が奉納した額が残されています。この奉納額は、戦況が次第に厳しさを増していた昭和 14 年に奉納されたもので、そうした困難な時代にあっても、職人たちが「木地師のふるさと」を大切に思っていたことがうかがえます。奉納額に名を連ねる「中田俊一」は、プラチナ万年筆の前身である中屋製作所の創業者として知られる人物です。

また、君ヶ畑町の金龍寺には「ろくろと万年筆」と刻まれた石碑があります。これは、戦後に改名された大阪万年筆共同組合が昭和48年に建立したもので、当時その組合は毎年秋に参拝をしていました。現在ではその組合も解散し、大阪で万年筆を製造する企業は姿を消しましたが、職人たちが木地師のふるさとに寄せた思いは、こうした奉納額や石碑を通して、今もなお静かに息づいているように感じられます。

パネディスカッション「木地師における伝統技術の継承とその課題」

コーディネーター：筒井正（東近江市参与）

木地職人、漆職人、寄木細工職人といった、異なる分野で伝統技術に携わる職人の方々に登壇していただき、それぞれの現場から見た現状や課題について率直な意見が交わされました。

■衰退する漆器業界の現状とその要因

《長谷川》衰退の要因として大きいのは、生活用品の変化と、企業や個人の記念品が減ってきたことです。現代の子供たちは、100円ショップのプラスチック製のお椀しか知らず、漆器に触れる機会がほとんどありません。だからこそ、「まずは実際に触ってもらうことが大事だ」と考え、会津若松市では小学生を対象にした蒔絵教室を続けています。厳しい現状はありますが、子供たちに未来を託したいと思っています。

《渡邊》私は価値観の変化が大きいと感じています。漆塗りに金箔を貼った仏壇は、高齢者のいる家庭には残っていますが、若い世代だけの家庭では、ほとんど見なくなりました。漆職人として漆塗りの良さを伝えていく必要性を感じる一方で、「どうすれば消費者の手元に届くのか」を考え、マーケティングや経営の勉強会にも参加してます。しかし、そうした場で伝統工芸の職人と出会うことは多くありません。結局、もうからなければ後継者は続けられない。職人がきちんともうかる仕組みをつくることが一番大事だと思います。

■伝統技術の継承とその課題

《下村》私は大学の伝統工芸の実習で宮島ろくろ細工に出会いました。母校の広島市立大学では、17年間にわたってその実習が続けられていますが、私以外に作家として活躍している方は1名にとどまり、多くが職人として育っているわけではありません。廿日市市としても後継者育成事業に40年ほど取り組んできましたが、職人として独立したのはわずか2名という厳しい現状があります。設備を整えることを考えると、独立するのはなかなか簡単ではありません。そうした状況の中ではありますが、行政と協力しながら教室を積極的に開き、宮島ろくろ細工に触れてもらう機会を増やしたいと考えています。まず知ってもらい、触れてもらうことで、職人になりたいと思う人が現れてくれたらと思っています。

《川北》私は大学卒業後、木地師を養成する石川県挽物轆轤技術研修所で学び、木地師になりました。研修所では、ろくろに向かう前に、まず道具づくりから学びます。鉋も、自分で金属を熱して叩き、実際に削れる道具を作れなければ、ろくろの作業には入れません。研修所がなかった頃は、親方について学ぶため、その工房ごとのやり方に限られていましたが、研修所では研修生同士が道具を貸し借りし、切磋琢磨しながら学ぶことができます。いろいろな視点を持って技術を継承できることで、結果的に技術習得も早くなると思っています。また、認知度を高めるためにSNSも活用しており、国内だけでなく、海外の方にも発信できるので、これからも続けていきたいと考えています。



長谷川利之さん（木地職人）



渡邊嘉久さん（漆職人）



下村祐介さん（木地職人）



川北浩嗣さん（木地職人）

(パネルディスカッション続き)

■後継者育成の課題

《長谷川》会津若松市では「会津漆器技術後継者訓練」があり、今年で20年になります。毎年3～4人が卒業し、そのうち6～7割が会津若松市に残るものの、多くは塗師となり、木地師になる人は残念ながらいないのが現状です。こうした課題を受けて、市職員の尽力により、インターンシップ制度を活用して木地師を育成する計画が進められています。私のところにも多くの注文が来ていますが、本当に木地師が足りないと実感しています。さらに、2018年には会津技術保存会を立ち上げ、産業としてだけでなく、文化として会津漆器を残していくこと、そして技術を次の世代へ継承していくことにも力を注いでいます。



露木清勝さん（寄木細工職人）

《露木》箱根寄木細工も組合設立当初に30社あった組合員は、現在では13社にまで減少しています。かつては若手職人が集まり、グループを結成して講習会や作品展を行い、「若手の伝統工芸職人」としてマスコミに取り上げられたこともありましたが、その当時のメンバーが今も職人として活動を続けています。その若手だった職人たちも、今は次の後継者を育てなければならない時期に来ています。しかし、大きくもうかる仕事ではないため、簡単ではありません。ものづくりをしたいという志を持った若者が続けていける環境をつくるのが、自分たちの使命だと思っています。

■新たな取組を通して

《露木》現代アートと伝統工芸の箱根寄木細工がコラボして新しい作品を生み出しています。また、星野リゾートが地域の特色ある宿泊施設を作るということで、箱根寄木細工に注目してくれています。ホテルに飾ってもらうだけでなく、寄木細工の体験も行っています。実際に体験してもらうことで興味を持ち、購入につながることもあります。作品を並べるだけでなく、どう作られているのかを伝えることが大切だと思っています。

《川北》工房でのろくろ体験をツアーコースに組み込んでもらっています。どんなに良い製品でも、ただ見せるだけではなかなか買ってもらえませんが、自分で大変なろくろ作業を体験した後に製品を見てもらうと、表情が全く変わります。現在は海外からの参加者が多いので、日本の方々にもまず知ってもらって、その良さを伝えていきたいと思っています。

《下村》宮島には多くの観光客が来られるので、その方々を対象にした体験に力を入れています。削りの工程では思うようにいかず、不格好になることもありますが、最後に磨きをかけることで艶のある作品に仕上がります。自分で削り出し、育てた作品をその日のうちに持ち帰れることもあり、皆さんとても満足した表情で帰っていかれます。そうした体験は、商品としての可能性だけでなく、自身の作品の新たな販路としても手応えを感じています。

木地師のふるさと 東近江市

発行：東近江市企画部企画課

〒527-8527 滋賀県東近江市八日市緑町 10 番 5 号

TEL（代表）0748-24-1234 （直通）0748-24-5610

FAX 0748-24-1457

Email kikaku@city.higashiomi.lg.jp

Facebook <https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi>

（Facebook では随時、お知らせ等を行っています！！）

市 HP



Facebook

